

徳島大空襲 きょう62年

惨状語る写真

六十二年前の七月四日未明、米軍のB29爆撃機が徳島市街に焼夷(しょうい)弾の雨を降らせた。逃げ惑う市民。あちこちから火の手上がり、夜空は真っ赤に染まった。約二時間にもわたって続いた徳島大空襲。夜が明けた市街地は一面焼け野原となっていた。その風景を四枚組で記録したパノラマ写真がある。写真。報道などに頻繁に使われ、目にする機会も多い。撮影場所は眉山中腹。中央に城山が見え、手前に新町川、奥に吉野川が流れている。だが街並みはなく、コンクリート製のビルがいくつか残っているだけ。大空襲がいかにすさまじかったかを今に伝えている。

写真を撮ったのは、徳島の食べ物が入る。島市内で創業百二十四年 食べ盛りの子供たちを抱える立木写真館の二代 目当主・立木真一さん(一八八三―一九五七)を撮るといふ父親に真つ(一八八三―一九五七)向から反対し「乾板を持って眉山に登り、四方向に分けてカメラを構えた。島は必ず復興する。その写真師としての使命感が撮らせたんでしょ。要になる」と言い、重いね」。こう語るのは、写真機と木製の三脚など真館の現社長・恵美子さん(一九一五―八六年)から、この写真撮影にまつわる話を聞いた。



立木恵美子さん

後年、香都子さんは神山町から家族で戻った。子供に食べさせるといふのは女としての本能だ。香都子さんら。「写真館が元気に帰ってきたといふことを示し、市民を勇気づけよう」と、写真館の再建を決めた矢先、真一さんが焼け野原となった市街地を写すと言いつつ、この写真撮影にまつわる話を聞いた。

「真一さんをすごい人だ」と思った。その恵美子さんは大空襲当時、小学五年生。母親の実家がある徳島市八万町大坪に疎開していた。

現社長「プロの使命感」

立木写真館 2代目当主撮影

た。父親が軍人だったため全国を転々とし、徳島の前には長崎県の佐世保にいた。そこには軍港があったため頻繁に空襲警報が鳴り響き、そのたびに防空壕(こう)に隠れた。だが大空襲一年前の四四年に徳島に疎開してくると生活は一変。「警報のサイレンは鳴らず食べ物にもあまり不自由しなかった。同じ日本でもなんにも違うのかと思っ」

そんな徳島で、戦争を実感したのが大空襲の夜だった。突然鳴り響いた空襲警報。慌てて家の外に出ると、眉山越しに見える空が真っ赤になっていった。市街地から離れていたため直接の被害はなく、それ以上の詳しい記憶はない。大空襲の悲惨さを教えてくれたのは、嫁いで来て見た「焼け野原の徳島」を写した四枚の写真だった。「映像ではなく写真にしかできないこと、写真館が街に貢献できることは何か。それは街の歴史を残していくことだということをつくづく感じる」と恵美子さんは語る。

徳島大空襲をはじめ、戦争を語り出すことのできる人たちが徐々に減っている。「歴史を風化させてはならない」と、各地で語り手を残す努力がなされている。この写真も、大空襲のすさまじさを今に語り継いでいる。